

はじめに

越谷市内にある変わった書体の文字塔を調査した。徳本行者（とくほんぎょうじゃ）の名号塔・祐天上人（ゆうてんしょうにん）の名号塔・木食観正（もくじきかんしょう）の名号塔・ヒゲ題目塔・篆書体（てんしよたい）の文字庚申塔・亀を表わす象形文字が刻まれた石碑……。独特の書体が目を引く十二基の文字塔を紹介する。

名号塔

名号塔（みょうごうとう）とは、阿弥陀如来をたたえる「南無阿弥陀仏」の六字（名号）が刻まれた文字塔のこと。六字名号塔とも呼ばれる。四字の「阿弥陀仏」、九字の「南無不可思議光如来」、十字の「帰命尽十方無光如来」が刻まれた名号塔もあるが、一般的には、名号塔といえば「南無阿弥陀仏」と刻まれた文字塔をさすことが多い。

徳本行者の名号塔

徳本行者（とくほんぎょうじゃ）は江戸後期、諸国を行脚し、布教につとめた浄土宗の僧侶。徳本上人（とくほんしょうにん）とも呼ばれる。「南無阿弥陀仏」と、ひたすら念仏を唱えることで救われるとした分かりやすい説法で、多くの民衆から慕われた。

徳本が書いた「南無阿弥陀仏」の文字は、丸みを帯び、終筆がはねあがっている独特な書体から徳本文字とも呼ばれる。自著の下にある丸に十字の花押（かおう）も特徴的⁽¹⁾。

⁽¹⁾ 庚申懇話会編（一九九五）『日本石仏事典・第二版』雄山閣「徳本念仏塔」一二三頁に、丸に十字の特異な花押について徳本自身が詠んだ「鬼殺す心は丸く田の内に南無阿弥陀仏と浮ぶ月影」という和歌が紹介されている。

（一）徳本行者の名号塔（西教院）

西新井の西教院（さいきょういん）にある徳本行者の名号塔（写真①）



①

江戸後期・文化十四年（一八一七）造立。石塔型式は兜巾（ときん）型。正面中央に独特の書体で「南無阿弥陀仏」と刻まれている。名号の左脇に「徳木」⁽²⁾の文字と、その下に、丸に十字の花押が刻まれている。

⁽²⁾ 「徳木」は「徳本」の誤記と思われる。

この徳本名号塔は「念仏講中」によって建立された。台石に刻まれている村名と町名は、三十町村と広範囲に及んでいる。

小曾川村・末田村・野島村・荻島・切・袋山村・鉤上新田・鉤上村・岩附城内・長島村・尾ヶ崎村・越ヶ崎村・西新井村・砂原村・須賀村・大道村・平林寺村・大里村・下間久里村・上間久里村・平間村・大森村・増林村・玄藩新田・大沢町・後谷村・神明下村・大竹村・三ノ宮村・下新井村

刻まれている念仏講員の人数は三百十三⁽³⁾。そのうち女性が二百八。女性の信者が七割近くを占めている。

③ 台石に刻まれている念仏講員の人数および性別は、一部、目視で確認できなかったもので、加藤幸一（二〇〇二）「平成十四年度 荻島地区の石仏 平成二十九年三月改訂」越谷市立図書館所蔵、七十一頁に従った。

（二）徳本行者の名号塔（林泉寺）

増林の林泉寺（りんせんじ）にある徳本行者の名号塔。石塔型式は角柱型。江戸後期・文政二年（一八一八）造立。徳本行者が没した文政元年（一八一八）の翌年に建てられた。正面中央に独特の書体で「南無阿弥陀仏」と刻まれている。名号の下に「徳本」の文字、その下に、丸に十字の花押が刻まれている（写真②a）



② a

裏面には、左右を反転させた鏡文字で、正面と同じ文字「南無阿弥陀仏」「徳本」と「花押」が刻まれている（写真②b）



② b

この鏡文字について、越谷市郷土研究会の加藤幸一氏は「信仰心の篤い人たちがやって来て、石塔裏面の石摺り用の鏡文字を拓本して自宅に持ち帰り、掛け軸などにして大切に祀りしたと思われる。徳本行者に対する信仰の盛んさを示す石摺り用の石塔としては珍しい」（④）と述べている。

④ 加藤幸一（二〇一九）「平成十六・十七年度 増林地区の石仏 平成三十一年七月改訂」越谷市立図書館所蔵、六十三頁

台石には「念仏講中」「千百餘人」とある。刻まれている村名は、下赤岩村・下広嶋村・拾壹軒村・松伏村・上赤岩村・下内川村・花田村・大沢町・増林村・増森村・中嶋村・弥十郎村・大吉村・下間久里村・小林村・西方村・川藤村と、十七町村に及んでいる。⑤

⑤ 村名は目視で確認できたが、誤読を防ぐために、加藤幸一（二〇一九）「平成十六・十七年度 増林地区の石仏 平成三十一年七月改訂」越谷市立図書館所蔵、六十三頁と照らし合わせた。

（三）徳本行者の名号塔（天嶽寺）

越ヶ谷の天嶽寺（てんがくじ）にある徳本行者の名号塔（写真③）



③

石塔型式は角型。江戸後期・文政十一年（一八二八）造立。正面中央に徳本文字で「南無阿弥陀仏」と刻まれている。名号の下に「徳本」の文字と丸に十字の花押が刻まれている。

台石の正面には「念仏講中」とある。石塔の右側面には「天嶽寺二十三主 教誉覚門上人代」の銘が確認できる。

（四）徳本行者の名号塔（観音横町の観音堂）

観音横町（現在の越ヶ谷三丁目）の観音堂にある徳本行者の名号塔（写真④）



④

石塔型式は角型。江戸後期・文政五年（一八二三）造立。正面中央に、徳本文字で「南無阿弥陀仏」と刻まれている。名号の下に「徳本」の文字、その下に丸に十字の花押が確認できる。花押の左右に「念仏」「講中」とある。

祐天上人の名号塔

祐天上人（ゆうてんしょうにん）は、江戸後期に活躍した高僧。浄土宗の大本山・増上寺の三十六世法主もつとめた。呪術に長けていたことでも有名。「南無阿弥陀仏」の六字名号を書写することとを生涯にわたって続けた。

祐天自筆の六字名号は、厄除けに大きな功德がある、と、多くの人々に崇められた。丸みを帯び、はねの部分が長く伸びた独特な書体は、祐天文字とも呼ばれる。漢字の「面」に似た花押も特徴的である。

（五）祐天上人の名号塔（西教院）

西新井の西教院にある祐天上人の名号塔（写真⑤）



⑤

石塔型式は角型。江戸中期・享保十八年（一七三三）造立。正面中央に、祐天文字で「南無阿弥陀仏」と刻まれている。名号の下に「祐天」の銘と、特徴的な花押が確認できる。

花押の下に「六十六部供養仏」の銘があることから、この祐天名号塔は六十六部供養塔を兼ねている。六十六部供養塔とは、全国六十六箇所の寺院を巡って法華経を奉納した記念に建てた供養塔のこと。

正面および左右には、武州長島村のほか、荻島村・神明村・大間野村・鉤上新田・平間村・中野村・尾ヶ崎村・小曾川村の村名が確認できる。

(六) 祐天上人の名号塔 (天嶽寺)

越ヶ谷の天嶽寺にある祐天上人の名号塔 (写真⑥)。石塔型式は笠付き角型。江戸中期・享保十八年 (一七三三) 造立。



⑥

正面中央に祐天文字で刻まれた「南無阿弥陀仏」、名号下の「祐天」の署名と「花押」、脇銘の「大僧正」「増上寺」は、すべて鏡文字 (左右を反転させた文字) になっている。

越谷市郷土研究会の加藤幸一氏は、「(信者が)この石塔に刻まれた鏡文字に墨を塗り、紙に写し取って(石摺り)持ち帰った」^⑥と述べている。また加藤氏は、この名号塔を「祐天上人の石摺(いしずり)名号塔」と名付けている。

^⑥加藤幸一 (二〇〇二)「平成十三年度 大沢・越ヶ谷地区地区の石仏 平成三十一年七月改訂」越谷市立図書館所蔵、四十一頁

木食観正の名号塔

木食観正 (もくじきかんしょう) は、江戸後期に活躍した行者。弘法大師の再来とうたわれ、民衆から熱狂的な帰依 (きえ) を集めた。木食上人 (もくじきしょうにん) とも呼ばれる。木食とは、木の実や草などを食べて修行をすること。

観正は、江戸や小田原を中心とした近隣各地で布教活動をおこなった。独特の書体で書かれた「南無大師遍照金剛」^⑦と、梵字の「ア・ウン」が刻まれた名号塔は、観正名号塔 (かんしょうみょうごうとう) と呼ばれ、各地に造立された。

^⑦南無大師遍照金剛 (なむだいしへんじょうこんごう) は、「弘法大師に帰依する」の意。南無は帰依すること。大師遍照金剛は弘法大師・空海のこと。また、遍照金剛は大日如来の別名でもある。

(七) 木食観正の名号塔 (迎摂院)

宮本町の迎摂院 (こうしょういん) にある木食観正の名号塔 (写真⑦)。石塔型式は変形角柱型。江戸後期・文政四年 (一八二二) 造立。



⑦

正面の中央に、観正の書による独特の書体で「南無大師遍照金剛」と大きく刻まれている。最頂部の左右には梵字の「ア」「ウン」、下部の左右には「木食」「観正」「観正」の下に「花押」がある。

石塔の下の蓮台（れんだい）には「光明真言講中」と刻まれている。台石には、四段にわたって多くの村名と人名が、びつしりと刻まれている。村名は六十三、人名は二百六十七^⑧。当寺の迎摂院の隆盛と、観正の影響力がうかがわれる。

^⑧ 村名と人名の数は、加藤幸一（二〇〇三）「平成十五年度 出羽地区の石仏 平成二十八年四月改訂」越谷市立図書館所蔵、三十七頁・三十八頁に従った。

利剣名号塔

（八）利剣名号塔（林泉寺）

増林の林泉寺にある利剣名号塔（写真^⑧）。石塔型式は兜巾型。江戸後期・天明四年（一七八四）造立。正面の中央に、先端がとがった文字で「南無阿弥陀仏」と大きく刻まれている。



⑧

剣のように先端がとがっている文字で刻まれた名号（南無阿弥陀仏）を利剣名号（りけんみょうこう）と呼ぶ。利剣とは、鋭くとがった刀剣のこと。邪気や災厄を断ち切る功德があるとされる。

この石塔は、天明三年（一七八三）に起こった浅間山噴火の供養塔を兼ねている。石塔の裏面には、浅間山噴火で亡くなった人々を供養するための文言が刻まれ、正面の利剣名号の脇に、「この利剣名号は天変地妖^⑨や疫病を取り除く」といった趣旨の銘文が刻まれている。

^⑨ 天変地妖（てんぺんちよう）は、天変地異（てんぺんちい）と同義。自然界に起こる自然災害のこと。暴風・豪雨・地震・落雷・噴火・洪水など。

題目塔

題目塔（だいもくとう）とは、日蓮宗の寺院や墓地などにみられる石塔で、法華経の題目（南無妙法蓮華経）が刻まれているもの。文字の端々を髭（ひげ）のように長くはね延ばした独特の書体から「ヒゲ題目」とも呼ばれている（画像^①）。



画像①

出典：コトバンク (<https://kotobank.jp/word/%E9%AB%AD%E9%A1%8C%E7%9B%AF-119452>)

（九）道しるべ付き題目塔（満蔵院墓地）

新川町（しんかわちょう）の満蔵院墓地にある道しるべを兼ねた題目塔（写真^⑨）。石塔型式は

駒型。造立年代は不詳。ひげ文字で「南無妙法蓮華經」(10)と題目が刻まれている。



⑨

左側面に「川上いわつき川下そうか向こしかや道」(11)とあり、道しるべになっている。満蔵院墓地の脇を流れる新川(古綾瀬川)の川上は岩槻で、川下は草加、向こう(正面前方)は越谷なので、この題目塔は、昔からこの場所にあったと思われる。

(10) (11) 石塔は劣化がひどく、読みとりにくい文字も多かったので、誤読を防ぐために、加藤幸一(二〇〇三)「平成十五年度出羽地区の石仏 平成二十八年四月改訂」越谷市立図書館所蔵、六十三頁と照らし合わせた。

(十) 題目塔(智泉院)

川柳町(かわやなぎちょう)の智泉院(ちせんいん)にある題目塔(写真⑩)



⑩

石塔型式は板碑型。江戸前期・延宝三年(一六七五)造立。正面中央に、ヒゲ題目(南無妙法蓮華經)が刻まれている。(12)

(12) この題目塔は、石仏や石塔が一箇所にまとめられた場所に並べられている。石塔間のすき間が狭く、ヒゲ題目は、かろうじて目視で確認できたが、正確を期すため加藤幸一(二〇〇七)「平成十九年度 川柳地区の石仏 平成三十年十二月改訂」越谷市立図書館所蔵、二十一頁と照らし合わせた。

その他

名号塔と題目塔のほかに、おもしろい書体の石碑を二基紹介する。

(十一) 卍亀碑(大聖寺)

卍(まんじ)の下に亀を表わす象形文字が刻まれた自然石の石碑(写真⑪)



⑪

場所（相模町の大聖寺（だいしょうじ））。年代は不詳。古来、長寿のしるしと尊ばれた蓑亀（みがめ）を表わした象形文字といわれている。

象形文字の両脇に「鶴は千亀は万歳」「齡ひへて かきりもあらぬ 卍字出しやむ」の銘文が刻まれている。この銘文について、越谷市郷土研究会の加藤幸一氏は、『齡ひ』『かきり』『卍字』・それぞれ『よわい』『かざり』『まんじ』と読む。「……」卍は、めでたさを表す印であり、この石塔は長寿の亀を表した吉祥の石塔といえる⁽¹³⁾と述べている。

⁽¹³⁾ 加藤幸一（二〇一九）「平成十六・十七年度 大相模地区の石仏 令和元年九月改訂」越谷市立図書館所蔵、五十一頁

（十二）篆書体文字庚申塔（平方の路傍）

石塔の正面中央に篆書体（てんしよたい）で「青面金剛」と刻まれた駒型の文字庚申塔（写真⁽¹²⁾）。場所は越谷市平方（ひらかた）。造立は江戸後期・寛政七年（一七九五）。石塔の下部（正面と両側面）に寄進者二十人の名前が確認できる。



⑫

この庚申塔は道しるべを兼ねていて、右側面に「向大どまり道」（向こう大泊道）とある。越谷市郷土研究会の加藤幸一氏は、この道しるべについて「ここより田畑を突っ切って大泊に通じる道があったことを示す貴重な歴史的資料である」⁽¹⁴⁾と述べている。

⁽¹⁴⁾ 加藤幸一（二〇一九）「平成五・六年度調査 桜井地区の石仏 平成三十一年八月改訂」越谷市立図書館所蔵、四十八頁

むすび

石塔に浮き彫りされている主尊の姿形などを鑑賞するのは石仏めぐりの魅力だが、一風変わった書体の文字塔を探すのも、なかなか楽しいものである。今回の調査で、名号塔や題目塔に出会い、日常の苦しみや災いから救われたいと願って、ひたすら念仏を唱え続けた祖先たちの切なる思いをしのぶことができた。

参考文献

- 加藤幸一（二〇〇二）「平成十四年度 荻島地区の石仏 平成二十九年三月改訂」越谷市立図書館所蔵
- 加藤幸一（二〇〇三）「平成十五年度 出羽地区の石仏 平成二十八年四月改訂」越谷市立図書館所蔵
- 加藤幸一（二〇〇七）「平成十九年度 川柳地区の石仏 平成三十年十二月改訂」越谷市立図書館所蔵
- 加藤幸一（二〇一九）「平成十六・十七年度 大相模地区の石仏 令和元年九月改訂」越谷市立図書館所蔵
- 加藤幸一（一九九四）「平成五・六年度 桜井地区の石仏 平成三十一年八月改訂」越谷市立図書館所蔵
- 加藤幸一（二〇一九）「平成十六・十七年度 増林地区の石仏 平成三十一年七月改訂」越谷市立図書館所蔵
- 加藤幸一（二〇〇一）「平成十三年度 大沢・越ヶ谷地区の石仏 平成三十一年七月改訂」越谷市立図書館所蔵
- 庚申懇話会編（一九九五）『日本石仏事典・第二版』雄山閣
- 日本石仏協会編（一九九七）『石仏巡り入門―見方・愉しみ方』大法輪閣
- 日本石仏協会編（一九八六）『日本石仏図典』国書刊行会
- 日本石仏協会編（一九九五）『続日本石仏図典』国書刊行会
- 萩原龍夫（一九七五）『越谷市史 第一巻 通史上』越谷市役所
- 越谷市史編さん室編（一九六九）『越谷市金石資料集』（市史編さん昭和四十三年度調査報告）越谷市史編さん室
- 越谷市史編さん室編（一九七〇）『越谷市民俗資料』（市史編さん昭和四十四年度調査報告）越谷市史編さん室
- 越谷市史編さん室編（一九七九）『越谷ふるさと散歩（上）』越谷市史編さん室
- 越谷市史編さん室編（一九八〇）『越谷ふるさと散歩（下）』越谷市史編さん室